赤ペン先輩

尾崎 太祐

『赤ペン先輩』　登場人物表

ナツミ（２５）　女性　先輩。脱サラ小説家。
トウヤ（２１）　男性　後輩。就職活動中の大学生。

※おことわり

本書は、上演当時の台本を再構成したものです。
上演にあたっては、事前のご連絡をお願い致します。

Mail:　ozata@outlook.com
Twitter [DM]:　@ozata92
※もし返信がない場合は、掲載されているウェブサイトの情報をご確認ください。

喫茶店。ナツミとトウヤがいる。
二人、目の前にある小説の原稿を読み上げている。

ナツミ　人生は、選択の連続だ。
トウヤ　昔、誰かがそう言ったらしい。
ナツミ　もしあの時、あの人にちゃんと思いを伝えていたら。
トウヤ　もしあの時、この道を選んでいなければ。
ナツミ　人生、こうなるはずじゃなかったのに。
トウヤ　今こんなに、苦しくなかったはずなのに。
ナツミ　選んで、悔やんで、積み重ねて。
トウヤ　それでも僕らは、たったひとつの答えを探しながら、
ナツミ　今日も選んで、生きていくんだ。

二人、原稿から目を上げて。間。

ナツミ　……どうかな？この始まり方。
トウヤ　……なるほど、面白いとは思います。
ナツミ　ありがと。
トウヤ　でも、ナシですね。
ナツミ　やっぱダメかあ。
トウヤ　ナツミさんらしくない。
ナツミ　私らしいってなによ。
トウヤ　男女が交互に喋って、生きづらさに悩んで、
ナツミ　それでも生きていかなきゃ……なんて、普通すぎますよ。
トウヤ　担当さんがね、今の流行を取り入れてみろって。
ナツミ　重いし、ありきたりすぎますって。やる気あるんですか、編集の人。
トウヤ　まあ怒るな後輩。なにか頼む？奢ってあげる。
ナツミ　……じゃあ、カフェモカ。
トウヤ　はいよ。

ナツミ、手を上げて店員を呼ぶ。

ナツミ　……ところで、そっちはどうなの、就活。
トウヤ　全然ダメですよ。
ナツミ　何社エントリーした？
トウヤ　数えるのをやめました。
ナツミ　面接は？
トウヤ　よくても一次面接まで。
ナツミ　苦戦してるねえ。
トウヤ　なんで先輩、ストレートで入れたんですか？
ナツミ　まあ私は、そういうの上手いから。
トウヤ　辞めてからは落選し続けてますけどね。
ナツミ　就活と小説は違うんです。自分のこと心配しなさい。

トウヤ　すみません。
ナツミ　それ、エントリーシートがダメなんじゃないの？
トウヤ　ですかねえ。
ナツミ　今見てあげるよ。なんか持ってる？
トウヤ　えー、いいですよ別に。
ナツミ　就職、したくないの？
トウヤ　ちゃんと、したいですけど。
ナツミ　はい、決まり！見せて！
トウヤ　いや！ナツミさんに見られるのは違うっていうか――
ナツミ　なに恥ずかしがってんの。現役時代に散々見せあった仲じゃない。
トウヤ　就活と小説は違うって――
ナツミ　恥ずかしがるなって！全部受け止めてあげるから。
トウヤ　べっ、別に恥ずかしいとかじゃなくて――
ナツミ　じゃあいいでしょ！早く！
トウヤ　あーもう、わかりましたよ！……これ、下書きですけど。

トウヤ、エントリーシートをナツミに渡す。

ナツミ　どれ……志望動機：御社の経営理念に共感し――
トウヤ　読み上げないでください！
ナツミ　ああごめん、ついクセで。

ナツミ、エントリーシートを黙読する。

ナツミ　なあんか、普通。
トウヤ　やっぱりやめましょうよ……
ナツミ　冗談。書いていい？
トウヤ　はい。

ナツミ、赤ペンでコメントを書き入れている。

ナツミ　書くなら御社じゃなくて貴社！
トウヤ　すごいじゃなくてすごく、いやとても！
ナツミ　潤滑油、ハッ、ありがちだな。
トウヤ　文末に思いますって使いすぎ。
ナツミ　小学生の作文じゃないんだから――
トウヤ　あの、そんなにダメですか？
ナツミ　今話しかけないで！
トウヤ　す、すみません……
ナツミ　専門用語ばっかり使っても伝わらない！
トウヤ　自分の思いだけじゃなくて、一緒に仕事したいって思わせなきゃ。

ナツミ、コメントを書き終える。

ナツミ　はい、サクッと赤入れたよ。
トウヤ　すごっ！
ナツミ　小説家志望ですから。
トウヤ　あの、字が読めないんですけど――
ナツミ　うるさい。いつもはパソコンで書いてるの！
トウヤ　まあ、ありがとうございます。
ナツミ　どういたしまして。
トウヤ　どうでした？全体的に。
ナツミ　うーん、固いかな。
トウヤ　というのは？
ナツミ　なんだろうなあ。無難な正解すぎて、逆に不正解というか、全部サンカクな感じ。
トウヤ　はあ…なるほど？
ナツミ　せっかくコメントしたし、ゆっくり書き直してみて。
トウヤ　まだ時間あるでしょ、〆切まで。
ナツミ　ああ、一週間くらいは。
トウヤ　じゃあまた来週！
ナツミ　えー！
トウヤ　私も直してくるからさ。また読んでよ。ね？
ナツミ　それは、いいですけど。
トウヤ　よし、決まり！それじゃ。
ナツミ　あ、俺まだ飲んでないし。
トウヤ　存分に悩みなよ、青年。
ナツミ

ナツミ、席を立ち、その場を去る。
喫茶店の入り口にあるベルの音。

トウヤ　そう言うとナツミさんは颯爽と帰っていった。あ、会計終わってねえ。
ナツミ　なあんて、かっこつけて帰ってきたけど、私も頑張らなきゃな。
トウヤはいつもまっすぐで、ストイックなヤツだ。
ちょっと不器用だけど、そこが可愛かったり。
トウヤと出会ったのは、私が大学４年の時。
ゆるーい文芸サークルの中で、数少ない新入生だった彼は、
最初、おとなしい男の子だと思ってた。
でも、その視線だけは、あの頃からまっすぐで。

回想、ここから。

トウヤ　先輩。
ナツミ　はい。ええと、トウヤくんだっけ？
トウヤ　先輩、ＳＦ、好きなんですか？
ナツミ　なんで？

トウヤ　「シンギュラリティ」とか「テレイグジスタンス」なんて言葉、知ってるんだと思って。
ナツミ　珍しいかな。
トウヤ　ＳＦファンしか知らないと思います。
ナツミ　そうかな。
トウヤ　てっきりＳＦが好きなのかと。
ナツミ　嫌いじゃないけどね。それは最近の調べごとの成果。
トウヤ　調べごと？
ナツミ　就活。
トウヤ　先輩、就活してるんですか？
ナツミ　うん。ＩＴ系受けようかなって。
トウヤ　小説は書かないんですか？
ナツミ　どうだろう？
トウヤ　もったいないですよ！これ、ＳＦだけどちゃんとリアリティがあって、すごい面白いと思います！
ナツミ　あ、ありがとう……
トウヤ　書いてください！先輩の作品、もっと読みたいです！
ナツミ　そんなふうに褒めてくれた人、初めてだよ。
トウヤ　俺、先輩に感想を伝えたくて。
ナツミ　うん、聞かせて。
トウヤ　あの、ロボットと暮らす２０３０年の生活って、テーマはすっごい面白いし、深いと思うんです。でも、クライマックスの書き方がもったいないと思って。
ナツミ　クライマックス？
トウヤ　この作品で本当に言いたいこと、キャラが素直に喋ってない気がします。

回想、ここまで。

ナツミ　あまりにまっすぐな目をした、私のファン第一号。
それ以来、私は作品を書くたび、
トウヤに最初に読んでもらうことにしたんだ。
「すごいです」「面白いと思います」から始まる感想は、
褒め言葉ばかりじゃなかったけど、
私の弱さに寄り添って、後押ししてくれるような言葉たちだった。

スマホのバイブレーションの音。
担当編集からの着信。

……はい、もしもし。
……お世話になってます。そろそろ結果が来るころだと……
……ああ、一次審査で。
……あの、なにがダメだったんでしょうか。自信はあったんですけど。
頂いたアドバイスをもとに、書き直したつもりですし――
……そうですよね、ありがとうございます。次、頑張りますので。

……あっ、この前の新作、続き書いてるので、今度見ていただけませんか。
……はい、よろしくお願い致します！
……はい、失礼します。

電話を切る。

ナツミ　もっと、いいもの書かなきゃ。

喫茶店の入り口にあるベルの音。

トウヤ　それで、直せた？エントリーシート。
ナツミ　なんとか。
トウヤ　では、早速見せてもらおう。
ナツミ　よろしくお願い致します。

トウヤ、カバンからエントリーシートを取り出す。

トウヤ　うん、前よりよくなってる。
ナツミ　よかった。
トウヤ　平凡な男から一皮剥けたな。
ナツミ　うるさいです。
トウヤ　これ、書き込んでいいやつ？
ナツミ　まだ直すんですか？
トウヤ　当然。
ナツミ　……お願いします。
トウヤ　お任せあれ。

ナツミ、鬼添削。

ナツミ　コミットとかバリューとかビジョンとか、横文字の意味ほんとにわかってる？
これネットからコピペしたでしょ、絶対トウヤの言葉じゃない。
一見すごいこと書いてあるように見えるけど、
文が長いだけで結局何が言いたいの？なにか学んだの？
これ、業界的には常識。学生が改めて書くほどのことじゃない。業界研究不足。
普通と同じことやったって、負けるだけなんだから、
もっと突き抜けないと、熱意が伝わんないよ！

ナツミ、コメントを書き終える。

ナツミ　はい、できた。
トウヤ　あ……ありがとうございます。
ナツミ　コメント読んで、書き直したら提出してね。
トウヤ　はい。

ナツミ　これ通ったら面接だっけ？そっちも見てあげようか？
トウヤ　いいですよ、さすがに恥ずかしいし。
ナツミ　恥ずかしがるなって。もう一回、エントリーシート貸して。

ナツミ、咳払いして。

ナツミ　それでは、弊社へエントリーいただいた理由をお聞かせ願えますか？
トウヤ　はい、御社の経営理念に共感したというのが一番の理由です。ＩＯＴ化が進んでいる今、これから数年の間に、私たちが触れるデバイスは――
ナツミ　はいストップ。
トウヤ　早い……
ナツミ　なんかウソくさい。台本読んでる感じ。
トウヤ　そんなこと言われても、難しいですよ……
ナツミ　エントリーシートに書いたこと、そのまんまじゃん。
　　面接なら、もーっと自分らしい言葉で話さなきゃ。
トウヤ　はあい。
ナツミ　では、次の質問です。うーん、そうだな。
　　あなたが学生時代に力を入れたことはなんですか？
トウヤ　あー、えーっと……
ナツミ　どうしました？

トウヤ、一呼吸置いて。

トウヤ　はい、サークル活動としてやっていた、小説の執筆です。
ナツミ　ほう、小説？
トウヤ　はい。在学中に十本ほどの短編小説を書いて発表しました。
　　ネットで公開したり、賞に応募したり、サークルの先（せん）……メンバーとフリーペーパーを作ったこともあります。
ナツミ　その中で、学んだことは？
トウヤ　学んだこと……
ナツミ　あるでしょ？
トウヤ　はい。書いた作品を持ち寄ると、同じテーマでも全く違う視点とか、新しい発想があることにびっくりしました。
　　前にある作品を読んだ時、他人の考えがこんなにも奥深く、面白いと感動したのを、よく覚えてます。
ナツミ　なるほど。では、伺いますが……どうしてＩＴ業界なんですか？
トウヤ　それは……
ナツミ　……はい、そこまで。まだまだだな！
トウヤ　すみません。

間。

ナツミ　でもさ、なんでなの？
トウヤ　え？
ナツミ　トウヤが就活なんて、やっぱりちょっと意外だな。
トウヤ　まあ、俺なりに考えた結果です。
ナツミ　作家目指すんだと思ってたのに。
トウヤ　まさか。
ナツミ　初めて読んだ作品、ＳＦだったっけ。好きだったよ。
トウヤ　ああ、ありがとうございます。
ナツミ　あんな感じで、また書けばいいのに。
トウヤ　一年以上ブランクあるし、先輩みたいには。
ナツミ　そうじゃなくても、編集とか。
トウヤ　そんな。
ナツミ　向いてると思うよ。私の作品にたくさん意見くれてたじゃない。
トウヤ　それはそうですけど、プロの編集なんて……
ナツミ　私の担当編集よりよっぽど私の作品のこと考えてくれるし。
トウヤ　ナツミさん……だから。
ナツミ　私？
トウヤ　だから仕事には、きっとできないです。
ナツミ　なんでこういうときだけ、読解力がないんですか先輩は。バカですか。
トウヤ　え、なになに、もしかして私のこと好きで――
ナツミ　バカですか！
トウヤ　２回も言うな！バカじゃないよバカ！
ナツミ　もういいです、次の予定あるんで、帰りますね！また連絡します。
トウヤ　ちょっと待ってよ！
ナツミ　あ、あと！
トウヤ　へっ？
ナツミ　今回こそ、奢りでお願いしますね！

喫茶店の入り口にあるベルの音。

ナツミ　行っちゃった……読んでもらいたかったな。

スマホのバイブレーションの音。
担当編集からの着信。

トウヤ　はい、もしもし。お世話になってます。
ナツミ　……え？今からですか？お電話ではなく――
トウヤ　……大事な話、ですか。
ナツミ　……はい、わかりました。すぐ伺います。

トウヤ　やらかした。
ナツミ　次、会うとき気まずいよなあ。
トウヤ　今日は俺が一方的に面接の練習に付き合わせただけ……

読めなかったなあ、作品の続き――
あ、エントリーシート。

トウヤ、カバンからエントリーシートを取り出す。
ナツミのコメントを読んでいる。

トウヤ　相変わらず読みにくい……
ナツミ　「総評：いい感じ。
でももう少し、キミらしい言葉で書いてほしいです。
トウヤ　どうしてこの会社にしたの？本当にここで働きたいと思って書いてる？
キミの気持ちが見えてこない。伝わらないです。
キミのひたむきな姿勢、まっすぐさはピカイチ。
だからもっと、あなたらしい言葉で思いをぶつけてください。」
先輩のコメントは、そのとおりだ。
どうして俺は、就活なんてやっているんだろう。
俺が今やりたいことって、なんだったっけ。
好きなことって、なんだったっけ。

スマホのバイブレーションの音。
ナツミから、ＬＩＮＥのメッセージを受信。

トウヤ　あ、先輩。
ナツミ　「さっきはありがとう。突然だけど、今夜会えないかな？
話しておきたいことがあります。」

ナツミ　ごめんねいきなり。早いうちに、直接話したくてさ。
トウヤ　いいですけど、何年ぶりですか、俺ん家に来るなんて。
ナツミ　現役時代に、何度か来たきり？
トウヤ　部屋掃除してないから、あの、お茶とかないし。
ナツミ　お構いなく。二人で話ができればいいから、気にしないで。
トウヤ　あの、お話ってなんですか。
ナツミ　どうしたどうした、いつもより固くないか？
トウヤ　わざわざ家まで来るくらいだから――
ナツミ　外でもよかったんだけどね、知らない人に聞かれるの、ちょっと恥ずかしいかなって。
トウヤ　大事な話、ですか。
ナツミ　まあ、言われてみれば、そうかな。

間。

ナツミ　なんだよ、こっちまで緊張してくるじゃん。
トウヤ　すみません。

ナツミ
トウヤ
ナツミ
トウヤ

間。

トウヤはさ、これからも私のファン第一号だと思ってるから。
は、はい。光栄です。
正直に言っておきたくて、押しかけたわけだけど。
はい。

ナツミ、一息置いて打ち明ける。

ナツミ
トウヤ
ナツミ
トウヤ
ナツミ
トウヤ
ナツミ
トウヤ
ナツミ

さっきね、編集さんに呼び出されて、連載したいですかって聞かれたの。
チャンスじゃないですか！
私もそう思って、もちろんですって即答したの。
すごい、すごいですよ先輩！
ありがと。
……なんでそんな、浮かない顔を。
ちょっと……問題があってね。
問題？
この前書いてる途中の新作、読んでもらったでしょ？
あれを連載してみないかって言われて、もう一回見せたんだけど。
ナツミさんの作品、定期的に読めるってことですか。
連載になればね。それで……怒らないで聞いてほしいんだけど。
はい。
……気づかれちゃった。トウヤに読んでもらってること。
「他に赤入れてるやつがいますよね」って。

ナツミ
トウヤ
ナツミ
トウヤ
ナツミ
トウヤ
ナツミ
トウヤ
ナツミ

……。
「流行りを取り入れてって言ったのに、変な方向に直してくるから気づいた」って。
そうですか……ごめんなさい。
謝らないで。いけないのは私だから。
俺のこと怒ってました？
「もうやめてください」って言われた。
……え？
作品読ませて、勝手に意見させないでください、って。
なんで。
「売れる作家になるために、友達じゃなくて、私の意見を信じてください」って。

ナツミ
トウヤ
ナツミ
トウヤ
ナツミ
トウヤ

間。

だから、今日はこの話をしたくて。
わかりました。いいですよ。
えっ……
もう、言いません。
……。
連載、したいですよね。頑張ってきて、せっかくのチャンスですもんね。

ナツミ　……。
トウヤ　でもそれって、本当に先輩の作品ですか？
先輩の書いたもの、売るために改造して、勝手に直されて、言いたいこと曲げて、我慢して妥協して。
ナツミ　それが言いたかったことなんですか。この道選んで、やりたかったことなんですか。
トウヤ　しょうがないよ、そういうことだってあるよ。
ナツミ　それがナツミさんの思いなんですか。
トウヤ　気持ちはわかるけど。
エントリーシートに、書いてくれたじゃないですか。
「あなたらしい言葉で、自分の言葉で、思いをぶつけてください」って。
ナツミ　あれはウソだったんですか？
……納得できるわけないでしょ。
でもさ、好きな気持ちだけじゃやっていけないの。
正解がないものを作るって難しいんだよ。厳しいのこの世界は。
トウヤ　世に出してもらえない、認めてもらえないって、怖いの。不安なの。
ナツミ　気持ちなんて捨ててでも書き続けなきゃ、作家として死んじゃうんだから……！
トウヤ　……すみませんでした。
ナツミ　私も、ごめん。
俺、ナツミさんはやっぱりすごいと思うんです。
言葉とか、思いとか、人間性とか、ナツミさんらしい表現、
全部、すごい好きなんです。だから……
うん、ありがとう。うれしいよ。

間。

トウヤ　ねえトウヤ、私のこと、やっぱり好き？
ナツミ　そうじゃなかったら、あんなこと言わないですよ。
言ったねえ。
トウヤ　……私もトウヤのこと、好きだよ。まっすぐに、向き合ってくれるとこ。
ナツミ　からかわないでください。
トウヤ　なに恥ずかしがってんの。胸の内、見せあった仲じゃない。
ナツミ　だからですよ……
トウヤにはかなわないなあ。
こんなにまっすぐな目で見透かされちゃ、先輩として面目ない。
私も覚悟決めるよ。だからさ、トウヤも、一緒に覚悟決めて。
トウヤ　覚悟？
ナツミ　私の隣りに居続ける覚悟。トウヤには離れてもらっちゃ困るんだ。
トウヤ　……これからも。先輩の隣に、いさせてくれませんか。
ナツミ　ありがとう。これからもよろしく、ファン第一号。
トウヤ　連載、今回はナシですかね。
ナツミ　残念だけどね。
でもいいよ、正解にたどり着く方法は、ひとつじゃないでしょ。
いつか編集長も唸らせる名作、書いてみせるから。

トウヤ　トウヤも、どんどんアドバイスちょうだいね。
ナツミ　はい。プロの編集に負けないくらいに。
トウヤ　これから目指せばいいんじゃない？
ナツミ　編集の仕事ですか。
トウヤ　安心しなさい、私がサポートするから。スパルタでね。
　　望むところです！

トウヤ　俺たちが選んだ答えは、思ったよりシンプルだった。

ナツミ　先日は申し訳ありませんでした！
　　でも、どうしても書きたいものがあるんです。
　　流行りガン無視ですし、大勢にはウケないかもしれません。
　　でも、それで勝負してみたいんです！
　　編集長にだって刺さるような、いいもの書きます！
　　だからまた、読んでください！

トウヤ　作品のいいところを引き出して、
　　頑張る作家さんの隣で一緒に走ることが、
　　僕が目指す担当編集の姿です。
　　もっと大勢の読者に、世界中のファンに、
　　作品や作家のすごいところを伝えられるようになりたいと思ってます！
　　皆さんのもとで、勉強させてください！

ナツミ　というわけで、あの作品、
　　これまでを踏まえて書き直してみたんだけど。
トウヤ　読ませていただくの、すごい楽しみです。
ナツミ　赤入れ頼んだよ、担当編集第1号。
トウヤ　厳しくいきますよ、先生。

ナツミ　人生は、選択の連続だ。
トウヤ　昔、誰かがそう言ったらしい。
ナツミ　もしあの時、彼の気持ちに向き合っていなければ、
トウヤ　もしあの時、彼女に思いをぶつけられずにいたら、
ナツミ　今日がこんなに、明るくなかったかもしれない。
トウヤ　明日がこんなに、楽しみに思えなかったかもしれない。
ナツミ　選んで、悔やんで、それでも前に進んで、また選んで。
トウヤ　選択肢は無数にあるはずだ。
ナツミ　正解だって、一つじゃないはずだ。
トウヤ　僕らは今日も選び続ける。
二人　キミが選んだ答えを、応援してるよ。

（おわり）